

明治維新の歴史社会学序説

早稲田大学 桜井 洋

1 目的

本報告は、近代化としての明治維新を事例とし、その原因の説明を社会学理論を用いて試みる。説明とは、ある現象が生起する関係を理論によって特定することであり、理論なくして説明はできない。歴史学ではかつてマルクス主義が粗雑な史的唯物論によって明治維新の説明を行おうとしていた。それに懲りてか、現状では歴史学は記述に専念しているが、時に説明の誘惑に負けることがあり、その場合に不適切な説明を行ってしまう。例えば明治維新の標準的な理解では、封建社会であった江戸時代の日本にペリーが来航し、それをきっかけに西欧近代の科学技術の優秀さを日本人は知るにいたった。そこで鎖国と攘夷の路線を変更し、明治維新後の明治政府は西欧の近代的制度を輸入して近代化を果たしたとされる。だがこの説明では、歴史上最大の社会変動である近代化を、明治政府の政治家が意図的に計画し、ごく短期間に成功裏に成し遂げたということになる。近代化は巨大な変動過程だからそれを意図したり計画したりすることは社会的に考えて不可能であり、このように考えることは維新政府の政治家に途方もない計算能力を認めることになる。また、その実現は短期間ではとうてい不可能である。この説明の難点は、常識的な自明性の中心である方法論的個人主義を無批判に歴史に当てはめている点にある。

2 方法

報告者は 2017 年に『社会秩序の起源 — 「なる」ことの論理』を上梓し、その中で複雑性理論にもとづく社会場の理論を提案した。本報告ではこの理論を明治維新に応用することで、維新の原因について考察する。社会場の理論はウェーバーの『プロテスタンティズムと資本主義の精神』の考え方と同様に、歴史を「思うこと」のダイナミクスとして理解する。明治になっての近代化がとくに大きな混乱もなく進行したことは、明治維新は日本における近代化の出発点ではなく、終着点であることを示唆している。つまり、日本社会の近代化はもっと遡らなければならないのだ。本報告では近代化を再帰性と秩序の抽象化という二つの条件からなるものと考え、そのダイナミクスを日本近世史に探る。まず、丸山真男を援用しつつ、日本における近代的な論理すなわち再帰性の出発点は、18 世紀の荻生徂徠の思想に求められることを示す。また、日本における社会秩序の抽象的認識は、同じく 18 世紀頃に始まる学校における会読の制度によって大いに促進されたことを示す。日本の近代化の出発点は 18 世紀初頭にあり、ペリー来航までの約 150 年間でモダニティという思いのダイナミクスが成長し強化されたのである。しかしその間、このダイナミクスはエネルギー的に上昇したが構造としてはいまだ出現しなかった。それが明治になって初めて突然の構造変動によって近代社会が出現したのである。社会変動のこの論理は、上記の『社会秩序の起源』において臨界と相転移の論理として定式化されたものである。

3 結論

日本の近代化は 18 世紀初頭に日本社会において自生的な形で創発し、展開した。それは既存の幕藩封建体制という制度の下での思いのダイナミクスの進化過程として進行した。

文献

桜井洋 2017 『社会秩序の起源 — 「なる」ことの論理』新曜社
丸山真男 1952 『日本政治思想史研究』東京大学出版会